

# 開發編

---



### III. 開発過程

本章のねらい：JF 日本語教育スタンダード試行版公開までの過程と、試行版を公開してから第1版公開までの概略を示す。

キーワード：理念・役割・意義、能力記述文データベース、ポートフォリオサンプル、事例集、教育現場との共同研究

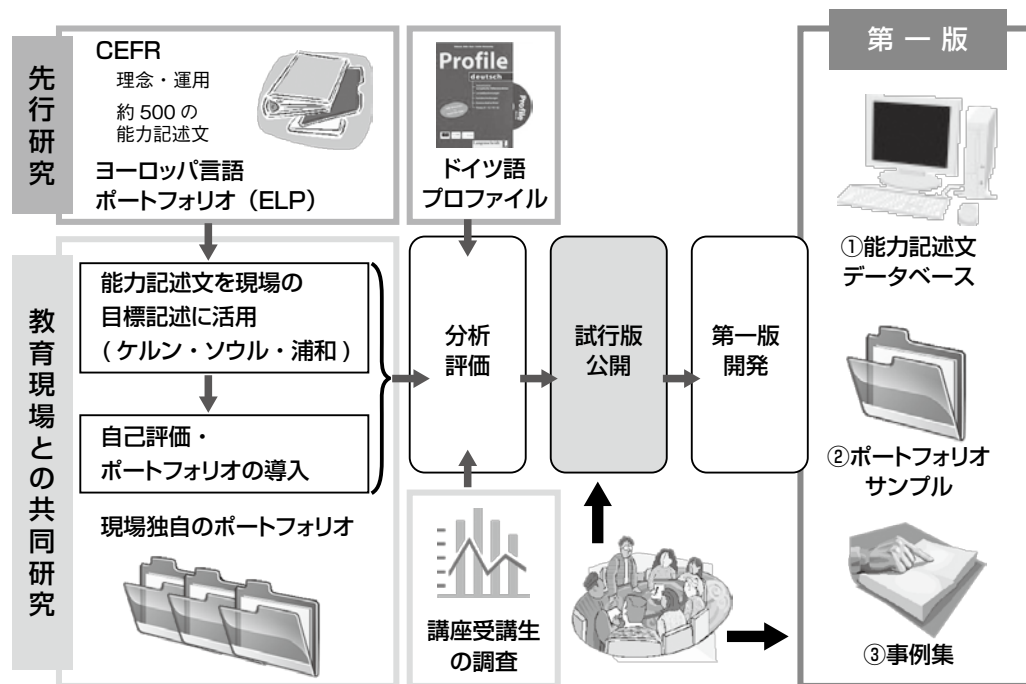
#### 1. はじめに

JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）試行版「理念編」において、JF スタンダードの理念として、文化を異にする人々が共に生きていく社会状況の中で、多言語のひとつとして日本語を位置づけることを目指し、「相互理解のための日本語」という基本的な視座を持つと述べた。そして、「相互理解のための日本語」を習得するためには、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」の2つが必要であると考えていることを述べた。また、JF スタンダードに求められる役割は、日本語教育が多様化する現状において、教員養成・再研修、カリキュラムやコースのデザイン、教材開発などについて議論する際に、同じ言葉で語るための議論の基盤や拠り所となることであると述べた。さらに、JF スタンダード構築の意義は、国際交流基金がこれまで海外で取り組んできた日本語教育事業を国際社会の新たな文脈に即して再考し、それを通じて汎用性が高い日本語教育のための枠組みを提供し、各現場の教育実践の「内省」と「対話」、そして他の現場との「対話」を促進することで、各教育現場の多様な実践をより効果的なものにするということであると述べた。

私たちは、JF スタンダードの開発過程において、これらの「理念・役割・意義」を念頭に、日本語教育現場に具体的かつ実践可能な形で JF スタンダードを提供するために、参照可能な先行研究の知見を概観した。その結果、グローバルな観点で日本語を多言語のひとつとして位置づけるためには、ヨーロッパの言語教育政策 CEFR に JF スタンダードの範を求めることが最適な選択であると考えてに至り、CEFR に関する先行研究の詳細な分析を行った。試行版の開発編は、JF スタンダードの「理念・役割・意義」を、各教育現場に具体的かつ実践可能な形で提供するための要件をまとめたものである。今後、これらの要件にもとづいて、JF スタンダード第1版開発の作業に着手することとする。

図1は、試行版公開までの過程と、第1版で提供する3つの提供物の関係を表したもの

図1 試行版公開までの過程と、第1版で提供する3つの提供物の関係



である。理念編の「JF スタンダードの全体像」ですでに示したように、第1版で提供するものは次の3つである。

- ① 能力記述文のデータベース (能力記述文 DB)
- ② ポートフォリオサンプル
- ③ 教育実践に活用するための事例集

JF スタンダード第1版として、これら3点を提供するのには、「CEFR、ELP、ドイツ語プロフィール等の先行研究レビュー」と「教育現場との共同研究」<sup>1)</sup>の2つの過程を通して、その必要性を認識したからである。以下、試行版の開発過程について述べる。

### 1.1 先行研究レビュー

CEFR を JF スタンダードの範とした理由として、グローバルな観点で、多言語化する国際社会に日本語を「多言語の1つとして位置づける」ためであるということはすでに述べた。CEFR が、「多様な教育実践の内容を明確に説明できる透明性と教育実践の比較や連携を可能にする一貫性を持っている」とともに、「言語教育とは言語コミュニケーション・スキルの習得を目標とするだけでなく、社会的存在としての人間に必要な異文化理

解能力、社会文化的能力、学習能力などの一連の能力の育成をも含むものであるとする」という考え方に、私たちが共感するからである。グローバル化が一層進展すれば、言語教育における国際社会の要請も変化することが予想されるが、日本語教育においてもグローバル化のダイナミズムの中でその方向性を検討していくことが必要であると考えます。

先行研究として、まず CEFR の理念と運用及び例示的能力記述文について詳細な分析を行った。次に、その CEFR の理念を教育・学習において具現化するためのツールとして、ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP: European Language Portfolio) の考え方や活用事例について検討した。そして、能力記述文の分析と ELP の検討結果をふまえ、教育現場との共同研究に着手した。また、教育現場との共同研究と並行して、CEFR の共通参照レベルに基づいて開発されたドイツ語教育のためのツールであるドイツ語プロフィール (Profile deutsch) の分析を行った。ドイツ語プロフィールの分析は、JF スタandardで提供する能力記述文 DB 開発の方向性を検討するために必須の作業であると考えた。CEFR、ELP、ドイツ語プロフィールのレビューの結果は、「IV. 先行研究レビュー」で詳しく述べる。

## 1.2 教育現場との共同研究 —JF Standardの試行—

JF Standardは、国際交流基金がこれまで取り組んできた日本語教育事業を国際社会の新たな文脈に即して再考することから始め、その作業を通じて汎用性の高い日本語教育の枠組みを示す。したがって、「JF Standardの試行」とは、「基金がこれまで取り組んできた日本語教育事業を国際社会の新たな文脈に即して再考すること」と位置づけることとする。将来的には、その枠組みを共通の「ものさし」や「ことば」として、各現場の教育実践についての「内省」と「対話」や、他の現場との「対話」を促進することで、多様な実践をより効果的なものにすることを目指している。

試行版で報告する JF Standard試行は、国際交流基金内の複数の教育現場との共同研究という形で進め、各講座の現状分析を行った後、目標設定と評価を CEFR の枠組みで見直すとともに、CEFR の枠組みを日本語教育に適用しようとした場合どのような効果や課題があるかを探求することを目的とした。共同研究を行った講座は、浦和の国際交流基金日本語国際センターで行われている外国人日本語教師を対象とした海外日本語教師短期研修、国際交流基金ソウル日本文化センターの上級日本語講座、国際交流基金ケルン日本文化会館の初級日本語講座、の3講座である。具体的な取り組みとして、① CEFR の能力

記述文を各講座の目標記述に利用する、②自己評価を中心としたポートフォリオ評価を導入するという2つの試みを行った。ただし、それぞれの現場には、これまでの豊富な実績と蓄積があると同時に、それぞれの現場が抱える課題や様々な制約事項も存在するため、各現場の状況を把握するために講座担当者との協議を重ね、それぞれの現場にあった進め方を選択した。「V. 教育現場との共同研究」で、講座ごとに詳しく報告する。

### 1.3 講座受講生の調査

前述の共同研究では、既存の講座の枠組みを大きく変えることなく、CEFRの枠組みで各講座の取り組みを見直すことに重点を置いた。したがって、CEFRの先行研究から得られた、言語学習者を「社会的な存在 (social agents)」と見なし、生涯という時間的な流れの中で言語を学び、様々な形で言語学習を展開し、様々な領域において言語を使用するという、時間的・空間的広がりにおいて、言語活動を包括的に捉えていくという観点での見直しは含まれていない。そのため、国際交流基金ケルン日本文化会館の日本語講座の受講生を対象に、受講生が日本語学習にどのような動機を持ち、どのような意識で日本語を学び、これまで日本文化や日本語をどのように体験してきたかを把握するため、日本語の使用行動や日本語に対する意識に関する調査を取り入れた。本調査は、独自の調査を新たに実施するのではなく、国際交流基金総務部企画・評価課等が国別評価手法の研究・開発の目的で収集したデータを、日本語学習レベルと日本に関する体験、日本への関心・イメージ、日本に対する認知度・好感度といった観点から再分析する二次分析の手法をとった。そして、分析結果をケルンの講座担当者にフィードバックすることで、カリキュラムやコースデザインの改定に役立てることを目的とした。調査の結果は、「VI. 日本語使用行動および意識調査」で報告する。

### 1.4 試行版公開から第1版開発に向けて

試行版では、先行研究レビュー、先行研究レビューに基づいた教育現場との共同研究、講座受講生の調査の結果から得られた成果と課題について報告する。開発編の終章である、「VII. JF 日本語教育スタンダード第1版開発に向けて」では、JFスタンダードの第1版で提供する、①能力記述文データベース、②ポートフォリオサンプル、③事例集の3つを、今後どのように開発していくのかについて述べることとする。

注：

- 1 「教育現場との共同研究」は、これまでに公開された JF スタンドアードの説明資料「講座内容の再検討調査」と同義である。

